

所在地 宮城県遠田郡美里町字一本柳・新一本柳・塩釜

立地環境 大崎平野東縁部、鳴瀬川左岸の標高9～10 mの自然堤防上

発見遺構 竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、堀、周溝状遺構

年代 8世紀前半～9世紀後半

遺跡の概要

一本柳遺跡は大崎平野東縁部に位置する。西の加美郡方面から東流してきた鳴瀬川が、南東へと方向を変えるあたりの自然堤防上に遺跡は立地している（第1図）。北東約4 kmの場所には城柵官衙関連遺跡の涌谷町日向館跡・城山裏土塁跡が、南西約7 kmの鳴瀬川上流右岸には多賀城創建期の瓦を生産した大崎市下伊場野窯跡群がある。

1995年から鳴瀬川左岸の堤防周辺を対象として約3万㎡にわたる調査が行われた結果、8世紀前半～9世紀後半の遺構群が検出され、有力者居宅を中心とした集落であると報告されている（宮城県1998・2001a）。

遺構群の変遷

主な遺構群はⅠ～Ⅳ期の変遷が示されており、Ⅱ・Ⅲ期が有力者居宅に関わると考えられている（第2図）。

Ⅰ期（8世紀前半）は、竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟が検出されているのみである。

Ⅱ期（8世紀中葉～末葉）になると建物数が大幅に増加し、SB1248・1249 掘立柱建物とそれに伴うSD924 周溝状遺構を中心に、その北側には倉庫群とみられる総柱建物4棟、南側には多数の土坑が形成される。そこから東に約300 m離れた場所では、多賀城創建期の軒丸瓦がまとまって出土したSD501 溝や、周溝状遺構を伴う掘立柱建物（SB714 + SD459・497）が認められる。

Ⅲ期（8世紀末葉～9世紀前半）は、周溝状遺構を伴う掘立柱建物・総柱建物群・土坑群のまともはⅡ期から継続し、その西側には溝と堀（SD664 + SA700）に区画された内部に、掘立柱建物2棟が建てられる（註1）。土坑群の東側には、周溝状遺構を伴い、1×1間の身舎の周囲に小規模な柱穴を巡らすSB1187 掘立柱建物があり、仏堂または神社ではないかと推測されている。

Ⅳ期（9世紀後半）の建物は散漫な分布で、複数個所に畑跡とみられる小溝状遺構群が認められるようになる。集落の衰退期とみられ、この時期をもって集落は廃絶する。

遺構群の特徴と仏教関連・祭祀関連遺物

当遺跡では、有力者居宅の主屋と明確に指摘できる建物は見つかっていない。周溝状遺構を伴う掘立柱建物（SB1248・1249・SB1160）は正方位を意識しているが、その北に並ぶ総柱建物（倉庫群）は主軸が14～20°ほど傾いており、軸線のずれも認められる。



第1図 一本柳遺跡の位置

これら建物群の南側に、多数の土坑が造られているのが特筆される（第3図）。82基検出された土坑は他の遺構との重複がほぼ無く、堆積土に炭や焼土を含むものが約半数認められた。平面形は44基が方形を基調とする。長軸方向も東西南北を意識した傾向があり、土坑群は何らかの規制の下で、北側の周溝状遺構で行われた作業に関連して形成され、それは火の使用を伴うものだったと考察されている（宮城県 2001a）。土坑の長軸方向を詳細に見ると、正方位の一群と 15° 程東に傾く一群とに分けられ、重複関係は後者の方が新しく、後者の軸線を延長した方向にはⅢ期の仏堂または神社とされる建物が存在している。興味深いのは、周溝状遺構とその周辺で計8点出土している「弓」「弓□立カ」と記された墨書土器の存在である（第4図）。報告書では、「弓」は「弓□立カ」を略したものとして解釈されている。「弓立」の字は「湯立（ゆだて）」の音に類似し、遺構群と火や祭祀との関連を想像させる。

また、土坑群のうち SK1088 からは、墨書で絵画が描かれた漆紙が出土した（第4図）。斜格子の内部に花や葉を描いたもので、花の蕾を描いた部分は宝相華文との類似も指摘されている。寺院関係の調度品や堂内装飾等との関連が想定されている（宮城県 2001a）。

このほか、中心域から東に約 300 m 離れた SD460 溝の SD421・459 周溝状遺構と重複する部分から、石製陽物の破片が出土している（第4図）。石製陽物の類例は、多賀城跡の城内（五万崎地区）や城外の方格地割・多賀城廃寺跡で出土している。多賀城の木製陽物については都城における道饗祭や宮城四角祭に類似した祭祀との関連が推定されている（平川 2006）のに対し、石製陽物はそれ以外の用途もあった可能性が推測されている（柳沢 2011）。当該資料も集落の境界における祭祀に関わる可能性がある。

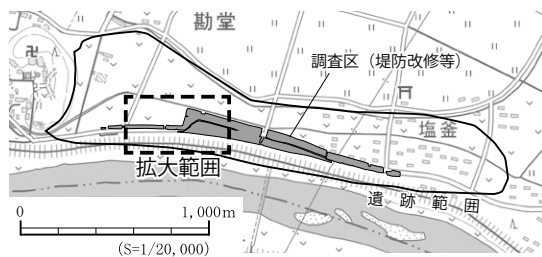
まとめ

一本柳遺跡では、8世紀中葉以降に倉庫群を伴う居宅が成立し、9世紀前半には仏堂または神社とみられる建物も付随するようになる。他の有力者居宅と比較して特異なのは、南側の土坑群の存在と、複数の仏教関連・祭祀関連遺物の存在である。上記以外にも、灰釉陶器手付水注や須恵器水瓶、鉄鉢形土器が出土している（第4図）。これら遺構・遺物の様相は、有力者居宅が担った役割の一つに宗教儀礼の場をあてる考え方（菅原 2007）とも符号し、それをやや色濃く示す遺跡として評価できよう。

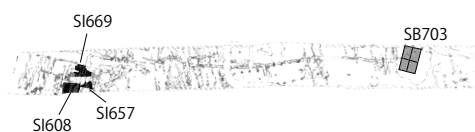
註1 報告書総括でⅢ期とされる建物とⅡ期の堀+溝を伴う建物は、事実記載部分の文章および平面図では前後関係が逆に示されている。このため、堀+溝を伴う建物は事実記載に従いⅢ期に改めた。

関連文献

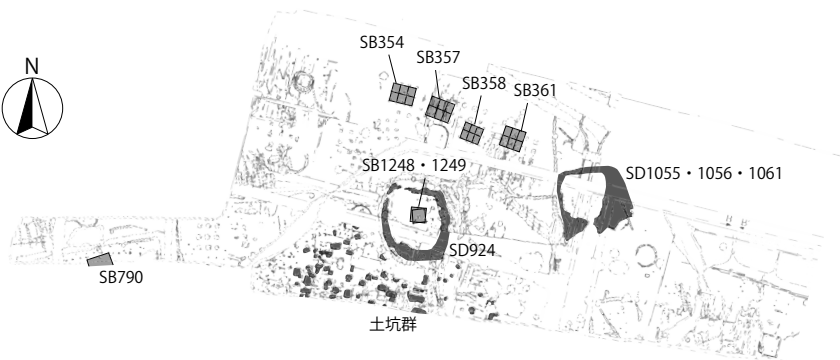
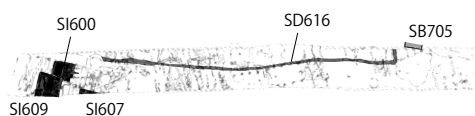
- 菅原祥夫 2007「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所
平川 南 2006「道祖神信仰の源流—古代の道の祭祀と陽物形木製品から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』133
美里町教育委員会 2007a『一本柳遺跡・牛飼遺跡』美里町文化財調査報告書第1集
美里町教育委員会 2007b『一本柳遺跡』美里町文化財調査報告書第2集
宮城県教育委員会 1998『一本柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第178集
宮城県教育委員会 2000「一本柳遺跡・牛飼遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第183集
宮城県教育委員会 2001a『一本柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第185集
宮城県教育委員会 2001b「一本柳遺跡・牛飼遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第187集
宮城県教育委員会 2002「一本柳遺跡・牛飼遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集
柳沢和明 2011「国府多賀城の祭祀」『東北歴史博物館研究紀要』12



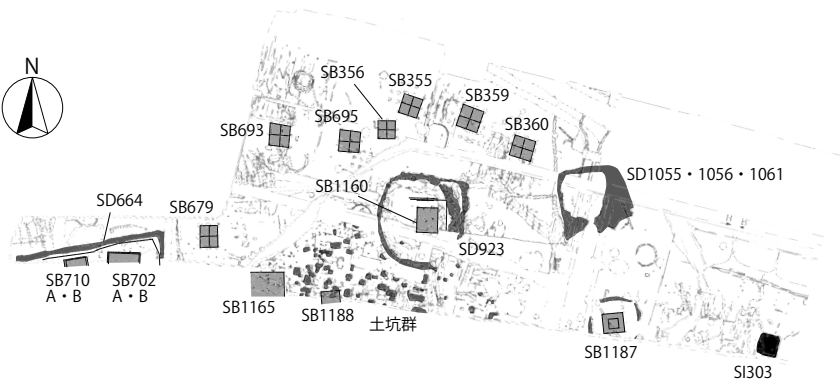
I 期 (8 世紀前葉)



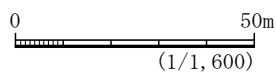
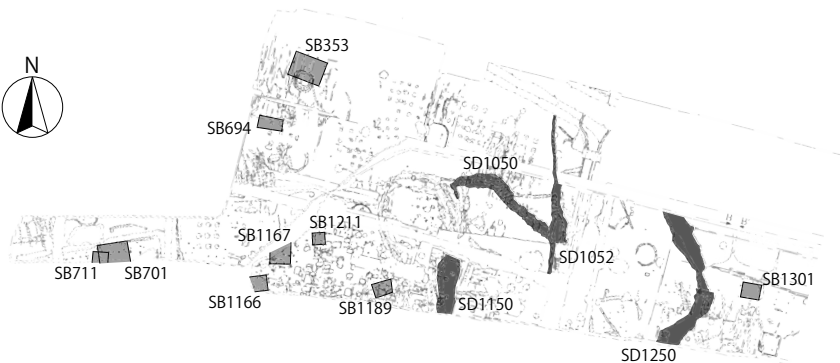
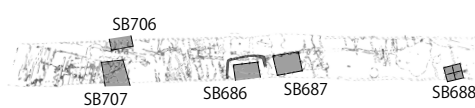
II 期 (8 世紀中葉～末)



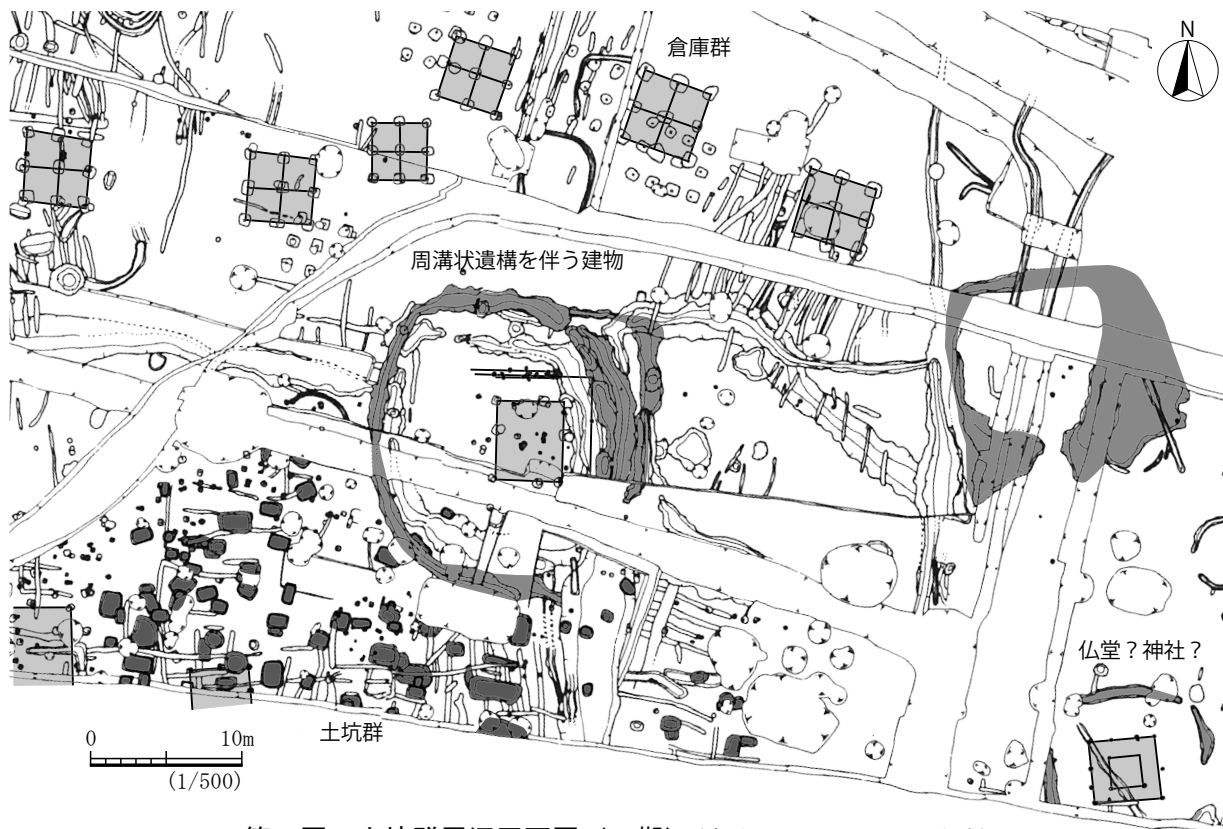
III 期 (8 世紀末～9 世紀前半)



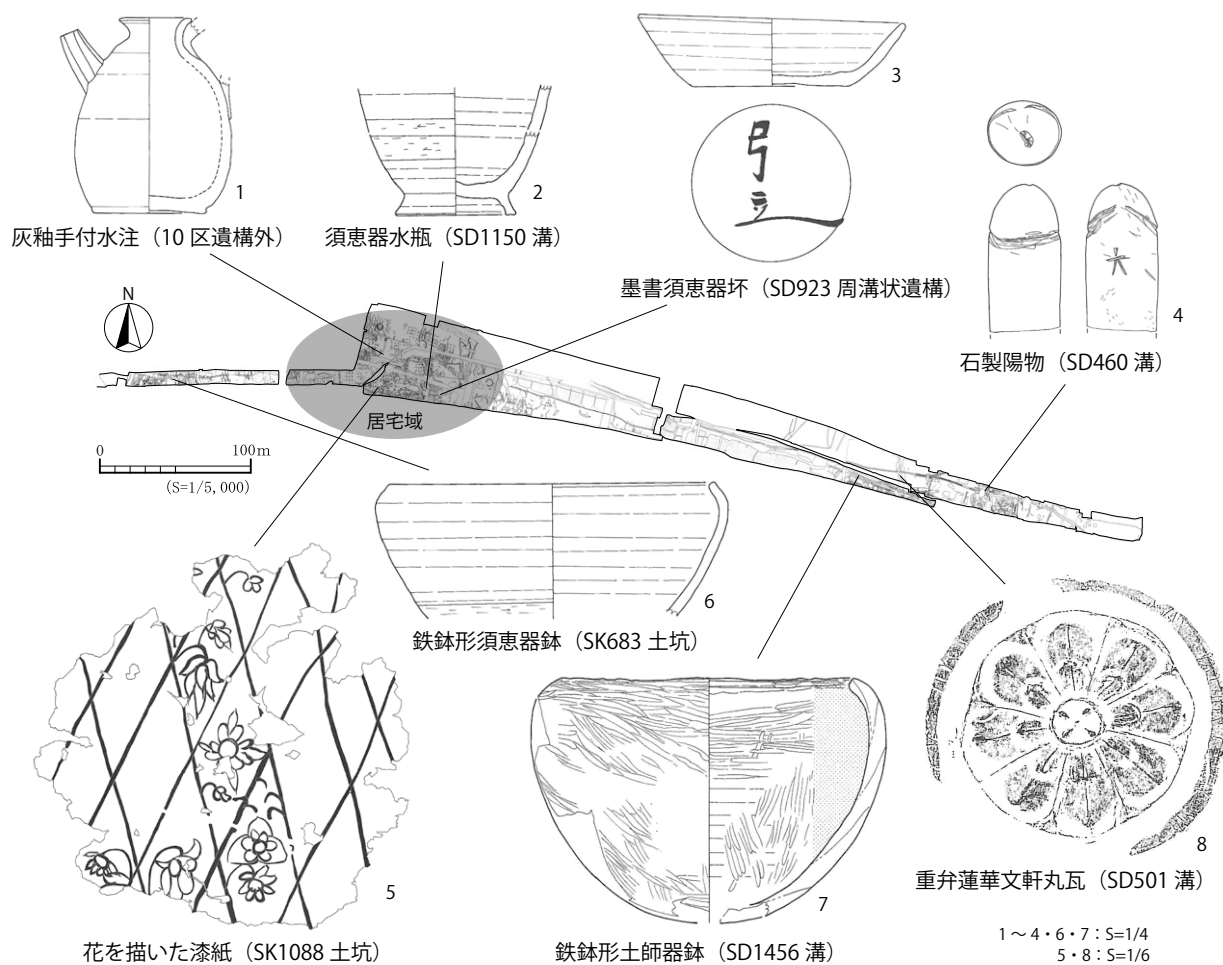
IV 期 (9 世紀後半)



第2図 主要遺構変遷図 (宮城県 2001a・b から作成)



第3図 土坑群周辺平面図（Ⅲ期）（宮城県 2001a・b から作成）



第4図 祭祀・宗教関連遺物等出土位置図（宮城県 2001a・b から作成）